

草双紙にみる桃太郎の教訓化

船戸，美智子

<https://doi.org/10.15017/4741885>

出版情報：雅俗．5，pp.22-25，1998-01-10．雅俗の会
バージョン：
権利関係：



草双紙にみる桃太郎の教訓化

船戸 美智子

一

書承の桃太郎として現存最古として知られるものは、享保八年（1723）の刊記を有する赤小本『もゝ太郎^{註1}』である。初期草双紙の赤本の昔話物は紙面の制約もあり、口承昔話を絵でたどる形で制作されている。藤田秀素筆の赤本「桃太郎^{註2}」では「ぢゝばゝもゝをふくし、たちまちわかやきて一子をもうけ、もゝ太郎となづく」。桃太郎は四才にして大力を見せつけ、やがて「だんごもつておにがしまへまいりたい」と親に乞い、日本一のきびだんごを犬猿雉に与えて供とし、鬼が島の門を破り、命乞いする鬼から差し出された「たから物を得て日本こくへかへる」。ここで注目したいのは、現代の桃太郎と異

なる次の二点である。

（一）桃太郎の誕生は、桃を食した爺婆が若返り、婆が出産する回春型。

（二）桃太郎が鬼が島へ向かう目的は、宝物奪取。

このような桃太郎が現代の桃太郎像にたどりつくには、江戸期においてどのような変容をとげたのであろうか。

二

回春型発生の根拠については、まだ解明されていないが、一つには西王母伝説に代表される桃の長生思想が知られていたことにあるだろう。宝暦三年刊の『桃太郎物語^{註3}』や小咄『今歳咄』（安永二）「ぢゝとばゝ」には、養老伝説との関連も見られる。

また草双紙の嫁入物の出産場面と同様に描かれる桃太郎出産時の図柄は、婦女の教化の一端として捉えることも可能かもしれない。安永六年に伊勢幸から再版された西村重信画『桃太郎昔語』に付された「童子養育」の角書も想い起こされる。

さて、桃太郎が割れた桃から生まれる果生型で描かれ始めるのはいつ頃からか。管見の限り最も早いものは、宝暦頃と言われる上方絵本『桃太郎』で、桃太郎は桃から手足を出している。浮世絵では明和頃までに描かれた鈴木春信の「見立て桃太郎」がある。安永九年刊の黄表紙『金々金平』（一竹斎達竹作画）では、桃から誕生するのは怪童丸ならぬ怪桃丸だが、桃太郎の果生型が知られていたことを示す一つの証左とはなる。馬琴は『燕石雜志』（文化八年刊）の中で、果生型を紹介しながら、回春型も割注にして書き留めている。翌文化九年に上梓された『赤本／再興／桃太郎』（式亭三馬作、歌川国丸画）も桃を食した爺婆が若返った後、米櫃の中に入れておいた桃の中から赤子が誕生する形になっており、当時二つの型が知られていたか。

この後、『童話長編』（黒澤翁満作、文政十三年序か）や『守貞謾稿』（喜多川守貞著、嘉永六年概略）「祖父祖母之物語」では、果生型のみが書き留められ、果生型は次第に主流となって伝承されていく。なぜ回春型から果生型に切り替わったのか。今日的な教育的な配慮が働いたのか。未だ謎である。

宝物奪取については、本来遠い島に数々の宝があり、それを得んとする冒険心が「宝を取りに鬼が島へ」という詞書に表れたと考えられる。そこには庶民の素朴な夢が託されており、鬼はその困難に立ちはだかるディテールにすぎなかったのである。

安永五年刊黄表紙『風流／桃太郎手柄話』は、桃太郎と銘打ちながら主たる筋立ては大江山によっている。ゆえに、桃太郎出生の発端となった爺婆の若返りの場合は省かれ、宝物奪取は忘れ去られて、鬼退治に主眼が置かれる結果となった。続く黄表紙の桃太郎ものにおいても、大江山の世界を取り込んだ作が目につく。それによって、これまであくまで桃太郎の欲心が契機となっていた鬼が島行きも、ここで鬼の非道ぶりが披瀝されることで、鬼

が惡の権化として祭られ、鬼は退治される対象として次第に正当化されていく。結果として桃太郎話の中心は、宝物を鬼から奪い取る形から、鬼に奪われた宝物や娘たちを取り返す話へと摩りかえられていくのである。

これは「赤本再興」をうたった三馬の『桃太郎』にも同様に受け継がれていく。

もも太郎鬼がしまのうハさをきゝ、にくきおにがしわさかな。いざやおにがしまへわたりて、おにをミなころしにして、たからものをとり来たらん（五ウ）

作者三馬には、文化年刊にはすでに見る機会を失った赤本を古様に倣って幼童に与えようという意図があった。しかし内容には往古の赤本の面影はない。赤本の素朴さから脱して、良い意味で当世を取り込み新奇を産み出したとも言えるが、一方で昔話の受容という観点からは、かつての赤本が温存していた桃太郎の素朴な夢は、あえなく捨て去られてしまったとも言えるのである。

三

幼童向けの豆本型昔話絵本は、天保頃にもみられた。

『桃太郎宝蔵入』（夷福山人（楽亭西馬）作、歌川広重^註画）では、かつての赤本を倣ってか回春型を継承しているが、ひと味違うこんな桃太郎も描かれた。

此もゝ太郎せいちやうするにしたがひ、はつめいにて、てらやへつかハしをきけるに、ふるきでしをおひぬき、手ならひものよミ、ことくくはやくおほへて、そのうへ力りやうあくまでつよく……（三ウ四オ）

挿絵においても団子を作る親の横で、本を手にする桃太郎が描かれている。ここにはもはや天真爛漫な桃太郎の姿はない。勤勉で賢い少年像が従来の力強い桃太郎像に重ねられている。すでに文化二年刊『昔話桃太郎伝』（南柚笑楚満人作、百斎（樹下石上）画）中でも「はつめい」という語は見受けられたが、『宝蔵入』で絵にも描かれることによって、その教訓性は高められた。

また富を得た桃太郎を孝行者として位置付けたのは、寛政七年刊の黄表紙『桃喰三人子宝嚙』である。文政三年刊、赤本仕立ての『昔噺桃太郎』（一九作、国貞画）は、親孝行するために鬼が島へ行くと理由づけている。

こうした孝行者の勤勉な桃太郎像は、おそらく幕府の寛政の改革でより推進された孝行者褒賞や文武奨励に代表される庶民への教化政策に関わりがあると考えられる。^{注7}『古事附桃太郎話』（三光堂阿童著、天明八年刊）、『道二翁道話続編』に見られる心学的解釈もそれに沿うものだったと言えるだろう。

四

先学によれば、昔話の教訓化に関しては、明治大正にかけての児童教育とともに語られることが多かったが、江戸期の桃太郎を概観してみると、それは幕府の教化政策の下にすでに江戸末期近くから表れていたことがわかる。江戸の桃太郎もまた、当時の理想的児童像を写していたのである。

その観点からすれば、草双紙はその児童像を作り上げる一助となっていたとも言えるのではないか。絵によるイメージ化はさらなる昔話の伝承を助け、同時に幼児の教育にも寄与することになったのである。

注

- 1 木村八重子氏「天理図書館の赤小本・雛本」ビブリア第105号（平八・五）に影印・翻刻・解説がある。
- 2 本書は稀書複製会本だが、表紙に貼付された「むかし／＼の桃太郎」の題簽は別のものから流用されたことが知られているので、ここでは柱題を用いた。
- 3 拙稿「翻刻『新板絵入桃太郎物語』」読本研究第七輯下套、平五・九
- 4 内ヶ崎由里子氏「『赤本再興桃太郎』について」『草双紙の翻刻と研究』第18号（平八・五）に影印翻刻がある。
- 5 『十二支鼠桃太郎』『はやりうた／大きにおせハ／金々金平』『爺山柴刈／婆川洗濯／鬼幅大通話』『山入桃太郎昔噺』『桃太郎大江山入』『桃食三人子宝噺』等。
- 6 加藤康子氏「豆本『桃太郎宝蔵入』と『桃太郎』について」、叢12号「昭和63年度科学研究費による『江戸時代の児童絵本の調査分析と現代の教育的意義の関連の研究』報告書」（平元・二）に翻刻解説がある。
- 7 拙稿「江戸の孝行実録」共立女子大学研究叢書第14冊（平八・三）を参照された。